



さくらケーシーエスは Cohesityでお客さま向け クラウドサービスの バックアップ基盤を刷新し、 拡張性と柔軟性を 飛躍的に向上

SMBC さくらケーシーエス

業種
テクノロジー

ユースケース
バックアップ & リカバリ

COHESITYソリューション
Helios

チャネルパートナー
伊藤忠テクノソリューションズ株式会社

SMBCグループの総合情報サービス会社として、システム構築・システム運用管理・システム機器販売を中心とした多様な情報サービスを提供するさくらケーシーエスは、クラウドサービスの提供基盤を3Tier構成からHCIへと刷新しました。アーキテクチャの変更にともなって、仮想マシンのバックアップソリューションに採用したのがCohesityです。運用管理工数を大幅に削減し、高い拡張性を備えることに注目しました。今後は、お客さま向けの新サービス提供にも活用する構えです。



株式会社さくらケーシーエス
データセンター クラウドアーキテクトグループ
グループ長

松本 雅博 氏



株式会社さくらケーシーエス
データセンター クラウドアーキテクトグループ
リーダ

藤井 克弥 氏

さくらケーシーエスについて

神戸を地盤に創業50年の実績を生かしたICTワンストップサービスを提供

さくらケーシーエス(以下、さくらKCS)は1969年に創業し、三井住友フィナンシャルグループ(SMBCグループ)の総合情報サービス会社として、システム構築・システム運用管理・システム機器販売を中心に多様な情報サービスを提供してきました。同社の最大の強みは、金融・公共・産業分野において創業以来50年にわたりビジネスを展開してきた実績とノウハウを生かした「ワンストップソリューション」にあります。

システムのコンサルティングから、システムインテグレーション(SI)、業種・業務ソリューション、ICT基盤ソリューション、データセンター、ビジネスプロセスアウトソーシング(BPO)まで、お客さまのニーズに応じて柔軟に組み合わせて提供しています。

”

「Cohesityは、『バックアップした仮想マシンデータを複製して
開発環境の構築などに活用したい』という相談にも、柔軟に応えることができます」

株式会社さくらケーシーエス データセンター クラウドアーキテクトグループ グループ長 松本 雅博 氏

例えば、業種・業務ソリューションでは、経費精算パッケージ、販売管理パッケージなどについて、一般企業をはじめ、金融、公共、医療、教育など、それぞれの事業形態に応じて提供し、構築から運用保守までをサポートしています。また、データセンター(DC)ソリューションでは、「さくらUTOPIAクラウド」ブランドのもと、兵庫県神戸市内に所在する利便性の高い都市型DCを活用し、IaaSサービスやハウジングサービス、BPOサービス、EDIサービス、パブリッククラウド接続サービスなどを展開しています。

さくらKCSでは、近年のお客さまのビジネス要件の変化や技術の進化を踏まえ、ワンストップソリューションを提供するためのITインフラ基盤を日々アップデートしています。2019年にはIaaSを中心としたクラウドサービス「さくらUTOPIAクラウド」を提供する基盤を、従来の3Tier構成のITインフラ基盤からハイパーコンバージドインフラ(HCI)基盤へと刷新しました。

アーキテクチャの変更に伴い、同社はIaaSサービスのための拡張性と柔軟性に優れたバックアッププラットフォームを探していました。これにより、データの成長を管理し、新しいワークロードに対応し、お客さまのニーズの変化に対応するための新しい機能を提供することが可能になります。クラウド基盤の構築・運用を担っているデータセンター クラウドアーキテクトグループ グループ長の松本 雅博 氏は、その意図を次のように話します。

「さくらUTOPIAクラウドは、国内の金融機関や地方公共団体、製造業を始めとする一般企業などのお客さまにご利用いただいているサービスです。ビジネス環境が大きく変化するなか、お客さまのニーズも変化しつづけています。サービス提供者側にもスピーディーに柔軟に対応することが求められています。ITインフラ基盤を刷新することで、パフォーマンスと拡張性、運用管理の効率性を向上させ、お客さま向けへのサービスの拡充と強化を図りました」(松本氏)

課題

サービスの利用増に伴って「拡張性」と「リストア」に課題が生まれる

さくらKCSのITインフラ基盤は、バックアップに関して大きく2つの課題を抱えていました。1つめは、「さくらUTOPIAクラウド」の利用が進むにつれてバックアップ対象のデータが増加し、柔軟で高い拡張性が求められるようになっていたことでした。

「バックアップソフトを使って仮想マシンごとに複数世代のバックアップを取得するという運用を行っています。お客さまの環境で何かトラブルが発生した場合や、お客さまから特定の時点に戻したいといったご要望をいただいた場合は、仮想マシン単位でリストアを行う必要があります。バックアップソフトは仮想アプライアンスとして同一インフラ基盤上で動作していますが、データ量の

増加とともにサーバーに負荷がかかるようになりました。また、バックアップサーバーの運用も複雑になり、サーバーを拡張する場合もコンピューティングリソースや追加ライセンスが求められます。結果的に拡張が難しいシステムになっていたのです」(松本氏)

もう1つは、取得したバックアップデータをお客さまのニーズに応じてリストアすることが難しく、お客さまが希望される高い事業継続性を確保することが難しくなっていたことでした。

「以前は仮想マシン単位でのバックアップとリストアが基本でしたが、最近では、ファイル単位でリストアしたいといったニーズや、アプリケーションの開発を行うために、仮想マシンのクローンから新しい仮想マシン環境を素早く立ち上げたいといったニーズが寄せられるようになりました。これまで利用していたバックアップソフトウェアではファイル単位のリストアは、一旦対象ドライブをリストアし、別ドライブとしてマウントする必要がありました。また、バックアップデータからの仮想マシン作成(クローン)では、本番ストレージへの負荷などから実現が難しかったのです。」(松本氏)

従来のITインフラ基盤は、VMwareベースの仮想サーバー400台、ストレージ装置5台(データ容量180TB)、仮想アプライアンスとしてのバックアップサーバー7台という構成で運用していました。新しいITインフラ基盤では、仮想サーバー400台とストレージ装置にNutanixを使用したHCI基盤へ統合するとともに、既存のバックアップソフトとは異なる方法でバックアップを取得する方法を検討しました。データセンター クラウドアーキテクトグループ リーダの藤井 克弥 氏は次のように話します。

「HCIを導入することで、複雑化していたITインフラ基盤の運用管理の効率化を目的とした単純化を実現しました。それにあわせて、バックアップ運用をシンプルにし、お客さまのリストアのニーズを満たすことを目指しました。その要件にあったのがCohesityでした」(藤井氏)

ソリューション

主に4つの項目で製品を検証、Cohesityはそのすべてを高い水準でクリア

Cohesityの選定にあたっては、さくらKCSは大きく下記4つの項目の検証を行いました。

1つめは、バックアップとリカバリの基本性能の高さです。さくらKCSは、圧縮や重複排除、増分バックアップなどの機能を使って大容量のデータを高速にバックアップ、リストアできるかを確認しました。また、レプリケーション、スナップショット、ディザスタリカバリなどの機能が、期待したパフォーマンスで実現できる

かも検証しました。その結果、Cohesityは、特にリストアについて、ファイル単位のリストアや、バックアップからクローンを迅速に立ち上げられることが評価されました。

2つめは、運用管理の効率性の高さです。従来のバックアップソフトでの運用では、日々のジョブの実行履歴を7台のサーバー単位で確認していく必要がありました。また、バックアップ基盤を構成するサーバー群が増加した場合、バックアップ対象のサーバー管理台数も増えてしまうため、1つの管理コンソールから、すべてのジョブを確認できることが望まれました。Cohesityは、画面の見やすさや操作のしやすさなどから、専門的なスキルを持たない担当者でも、簡単にバックアップ運用ができるGUIを備えていることが大きなポイントとなりました。

3つめは、拡張性の高さです。仮想マシンの台数やデータ量が増加した場合に、それにとまってライセンス数やバックアップ基盤の構成の複雑性が増すのではなく、シンプルに管理できることが重視されました。CohesityのWebスケールアーキテクチャは、シングルノードから大規模なマルチノードクラスターへ、運用負荷を高めずに拡張できる点が特に優れていました。また、バックアップソフトとストレージ装置のバージョンや互換性を気にする必要もなく、HCI環境で複数のハイパーバイザーやOSをサポートできることが評価されました。

4つめは、サポート体制の充実です。ITインフラ基盤を、HCI基盤とマルチノードフォールトトレランスのバックアップ構成に刷新することで、交換頻度と対応コストの削減に貢献しています。

「Cohesityはこれらの検証項目すべてで満足できる水準を達成していました。当社のデータセンターへCohesityを導入するとともに、DRサイト側にもDR用のCohesityを導入する構成で運用をスタートさせました」(藤井氏)

結果

将来的には、顧客仮想サーバーのクローン提供や脆弱性診断などの新サービスの提供も視野に

2020年からHCI基盤とCohesityデータ管理ソフトウェアでの本格運用を開始しましたが、これまでにさまざまな効果が確認されています。

最も大きな効果は、運用工数の大幅な削減です。7台のバックアップサーバーの運用とバックアップのためのストレージの管理が不要になり、バックアップジョブ

の確認は1つの管理コンソールだけで実施できるようになりました。さくらKCSは、Cohesityにより、仮想マシンの検知や保護を自動化したり、バックアップとリカバリをポリシーベースで自動化したりすることが容易になりました。

「お客さまは、IaaS基盤のハイパーバイザーとしてVMwareだけでなく、AHVを選択することもできます。AHVを採用するお客さまは年々増えてきていますが、Cohesityひとつでハイブリッド環境に対応できます。バックアップ運用管理は目に見えて改善しています」(松本氏)

2つめの効果は、クラウド基盤の拡張に合わせて、バックアップ基盤も柔軟に拡張できるようになったことです。

「DRサイトを含めて2拠点でCohesityを運用していますが、仮想マシンの台数やデータ容量が増えても、運用プロセスを変更する必要がなく、そのままバックアップ基盤を拡張させていくことができます。小さくスタートして大きくスケールできるCohesityは、今後のビジネス展開においても重要な資産になると考えています」(藤井氏)

さらに、柔軟なリストアが可能になったことで、お客さまに対して新しいサービスも提供しやすくなったと言います。

「Cohesityは、『バックアップした仮想マシンデータを複製して開発環境の構築などに活用したい』という相談にも、柔軟に応えることができます。また、新機能として提供されたリストア操作画面を使うことで、お客さま自身でファイル単位でのリストアなども実施できるようになりました。今後は、Cohesityのさまざまな機能を活用していきたいと思っています」(松本氏)

さくらKCSはCohesityソリューションを活用することで、お客さま向けのITインフラ基盤の拡張性を高めるとともに、お客さまのニーズにスピーディーに対応できるようになりました。Cohesityは、さくらKCSのビジネスを大きく成長させ、必要に応じてスケールアップできるエンジンのような存在です。さくらKCSのクラウドサービスに欠かせない基盤の1つになっているCohesityは、これからもさくらKCSのビジネスの成長を支えていきます。

Nutanix、Nutanixのロゴマーク、および本サイトに記載されているその他のNutanix製品や機能は米国およびその他の国におけるNutanix, Inc.の登録商標、あるいは出願中の商標です。VMware、VMware ESXiは米国およびその他の地域におけるVMware, Inc.の登録商標または商標です。

詳しくは [Cohesity.com](https://cohesity.com) をご覧ください。

COHESITY

©Cohesity, Inc. 2021. All Rights Reserved. 本文書は情報提供のみを目的としており、内容に不正確な点があってもCohesity, Inc.は一切責任を負いません。

Cohesity, Inc.は事前の予告なく本刊行物を修正する権利を留保します。法的事項の完全な説明については、こちらをご覧ください。

Cohesity、Cohesityのロゴ、SnapTree、SpanFS、DataPlatform、DataProtect、Helios、およびその他のCohesityのマークは、米国および/または海外におけるCohesity, Inc.の商標または登録商標です。その他の会社名および製品名は、関連する各企業の商標である可能性があります。本資料は、(a) Cohesityと弊社の事業および製品に関する情報を提供することを目的としています。(b) 本資料が作成された時点では、真実かつ正確であると考えられていますが、予告なく変更されることがあります。(c) 本資料は、「現状有姿」で提供されます。Cohesityは、いかなる種類の明示的または黙示的な条件、表明、保証も放棄します。

